弘前大学地域創生本部ボランティアセンター
NEWSLETTER
VOL. 22
OCT, 2026



CONTENTS

▶学生事務局 活動レポート
▶弘前大学資料館 第41回企画展
▶令和7年度 活動報告会
▶令和8年度第1回 市民ボランティア講座
▶サイバー防犯 ボランティア委託状交付式
▶令和8年度 第1回研究体験事業

今号でご紹介する活動について、コメントをくれた学生事務局メンバーを紹介します！



原田　秀憲　さん
人文社会科学部3年



小笠原　奏子　さん
人文社会科学部3年



清水　遥仁　さん
人文社会科学部3年

INTERVIEW

学生事務局メンバー活動レポート

現場での活動はもちろん、ボランティアセンターの中心となって企画や運営をサポートしてくれている学生事務局メンバー。
今回は、実際に様々な現場を経験した、原田さんと小笠原さんにインタビューを行いました。
活動を通して見えてきたボランティアの魅力や、経験の中で生まれた心境の変化、自分自身の成長、そしてこれからの目標について尋ねました。

Q1-今年度の活動の中で最も印象に残っているものや楽しかった活動は何ですか？

原田（以下原）：半年に1回の「研究体験事業」ですね。普段の「あっぷる〜む」で中高生と接することが多いのですが、研究体験事業は小学生が相手なので、話の内容がいつもと違って新鮮なんです。

小笠原（以下小）：世代のギャップを感じますよね（笑）。今の小学生のリアルタイムの話題が聞けるのが楽しいです。

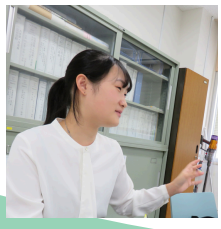
原：子どもたちとの会話に出てきた話題を自分なりに調べて、次の機会に生かすようにしています。

小：私は板柳の子ども食堂のお化け屋敷運営ボランティアです。行ってみたら広いホールを使ってゼロからお化け屋敷を作ってくださいって感じで…（笑）まず会場をどう使うのかを決めて、コースを作って、お化け屋敷に置く小道具もそれから買い出しに行って…お祭りが始まるまで、3時間くらいしかなかったんです。初対面のボランティア同士でアイディアを出し合いながらゼロから形にしていく作業はこれまでとは違って大変でしたけど、その分達成感があって楽しかったです。

Q2-様々なボランティア活動に参加する中で、お二人が感じた「ボランティア活動の魅力」とは？

原：達成感ですね。「あっぷる〜む」で関わった子どもたちが志望校に合格したりすると自分のことのように嬉しいですし、人に教えたり、何かを与えたりすることがすごく好きなんです。家庭教師のバイトもやったことがあるんですけど、僕はボランティアで学習支援をする方が自分には向いていると思っていて。自分自身も教わる子どもたちにも主体性が生まれて、ひとつの目標に向かって強い絆が生まれる気がします。

小：私はボランティアを通して色んな世代の方と関わったり、交流を通じて自分の考え方や視野が広がっていくのが魅力の1つだと思います。実は私あまり自分の事好きじゃなくて（笑）でもボランティアをすることで、一個人として誰かに必要とされてるって実感ができて、ここにいてもいいよって言ってもらえてるような…少しだけ自分を好きになれた気がするんです。



自分で何かを達成することで満たされるのではなくて、人から感謝されたり、認めてもらうことで満たされる。そんな人たちがボランティアセンターには集まっている気がします。

Q3-ボランティア活動を通して、自分自身が成長できた部分や、新しく発見した強みを教えてください。



原：日頃子どもたちに接する中で、本人に考えさせて答えを導きだすのが上手くなったな、と感じています。以前はつい自分ばかり話し過ぎたり、教え過ぎたりしていましたが、相手の立場や気持ちに寄り添って話すことを意識してから、子どもたちが心を開いて自主的に答えへたどり着いてくれるようになりました。

小：人が好きということに気が付けたことです。高校までは、あまり人と話したくないし1人でいるのが好きだったんですが、ボランティアを始めてから人の話を聞いたり、人と接するのが好きになりました。今までは与えられた役割を淡々とこなすだけで、人の嫌な面ばかりみえてしまっていたんですけど、自主的にボランティア活動をしていく中で、人の良いところに沢山気が付けるようになりました。本当は自分が人と関わることが好きなんだって気が付けたのが私の中で大きな発見でした。

Q4-これからの活動における目標や今後挑戦してみたいことを教えてください。

原：担当リーダーとして、あっぷる〜むをより良い居場所にするために、僕たち教える側の学生もみんなが同じ熱量で関われるように、新しく参加してくれる学生に子どもたちへの教え方や接し方、暖かい雰囲気づくりを伝えていきたいですね。個人としても、県外や遠方でのボランティア活動にも積極的に挑戦して、自分の視野を広げたいです。

小：授業、就職活動、ボランティア活動をバランスよく両立できるようにスケジュール管理を頑張りたいです。あとは、今年度に入って人数が増えた学生事務局内の交流を深めて組織の基盤を整え、みんなが気持ちよくボランティア活動できるサポートができたらと思います。

Q5-最後にボランティア活動に興味を持っている学生へ向けてメッセージをお願いします。

原：ボランティアを始めるきっかけは何でもいいと思います。気負わずにまずは一歩踏み出してみてください。ただ、活動するときは子どもたちのお手本になれるよう、真剣に向き合ってもらえたら嬉しいです。

小：私もきっかけは何でもいいと思います。もし、学業との両立が難しくなったり辛くなったりしたら、無理して続けなくてもいいと思います。まずは自分の生活や健康を一番に考えて、楽しく続けられる範囲でボランティア活動をしてもらえたらと思います。

REPORT 01

弘前大学資料館第41回企画展

「ボランティアセンター 東日本大震災復興支援活動 ～15年の歩み～」を開催

本展示会は、東日本大震災から15年を迎えるにあたり、弘前大学を起点として展開された復興支援活動の経験と教訓を共有し、今後も多発が予想される大規模災害への備えを新たにすることを目的として開催されました。震災当時、学内にボランティアセンターがなかった中で、教員有志が中心となり、市民・市民団体・行政と連携して「チーム・オール弘前」を立ち上げ、被災地支援を迅速かつ継続的に展開してきました。この官民学連携による取り組みは「弘前モデル」として注目されています。

展示では、活動の歩みを紹介するパネル展示や映像上映に加え、段ボールベッドや簡易トイレ、アルファ米を用いた避難所体験コーナー、大学の専門的知見を活かした文化財レスキュー活動の写真展示を行いました。会場では、学生事務局メンバーがガイドとして来場された方々へ当センターの歩みや日頃の活動について丁寧に解説を行い、直接言葉を交わしながら案内したことで、当センターの取り組みをより深く知っていただくきっかけとなりました。

これらを通じて、地域の大学が果たしうる役割と、平時からの連携の重要性を伝え、災害への実践的な備えにつなげます。







小笠原さん

ガイドをするにあたり東日本大震災が起こった当時のことをセンター長の李先生からレクチャーを受け、そのあとに自分の言葉で内容をまとめました。とても緊張して、ガイドの時のことはよく覚えていないのですが、自分にとって人前で話すことはとても良い経験になったと思います。

今回のガイドで、当時から15年も続いているボランティアセンターの活動を自分たちも繋ぐことができたように思います。

REPORT 02

令和7年度活動報告会を実施

弘前大学地域創生本部ボランティアセンターでは3月10日（木）に、弘前大学地域創生本部ボランティアセンター活動報告会を弘前大学人文社会科学部4階多目的ホールおよびオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

本報告会は、当センターの1年の活動を振り返り次年度以降の運営に役立てること、また東日本大震災をきっかけに設立され今年度で15年目となる当センターの歩みについても振り返り、参加者に経験と教訓を共有することを目的として開催し、オンライン参加者10名を含む約25名の参加がありました。



前半は、チーム北リアス（野田村）現地事務所長　貫牛 利一氏から、「東日本大震災からの歩み・15年」と題したご講演がありました。ご講演では、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県・北リアス地域（特に野田村）の復興を長期的に支援するために立ち上げられたボランティアネットワークであるチーム北リアス結成の経緯、15年間で行ってきた活動内容について説明がありました。貫牛氏からは、活動を通して生まれたつながりを今後も大切にしたいとのご発言がありました。併せて、ボランティアセンター長の李 永俊から、本学ボランティアセンターが行ってきた活動について説明を行いました。

後半は、当センターの学生ボランティアである人文社会科学部2年 清水 遥仁さん、人文社会科学部2年 原田 秀憲さん、人文社会科学部1年 小林 幸愛さんから今年度の活動報告があり、野田村支援交流活動や学習支援事業、サイバー防犯ボランティアについて学生自身が感じたことなどが述べられた後、李センター長と貫牛氏、八戸工業高等専門学校嘱託教授　河村 信治 氏、学生3名で意見交換が行われ、災害支援ボランティアのモチベーションや、ボランティア活動の今後の展望などについて様々な意見が出されました。最後に当センターのボランティアポイント制度でポイントを一定数獲得した学生の表彰が行われ、本報告会は終了しました。

当センターでは、本報告会で得た知見を参考に、今後もボランティア活動を実施していく予定です。

REPORT 03　令和8年度第1回市民ボランティア講座を開催

弘前大学地域創生本部ボランティアセンターでは、NPO法人おりがみの理事長である都築　則彦氏をお招きし令和8年5月22日（金）、今年度第1回目となる市民ボランティア講座『学生ボランティアの輪を、どのように広げるか』を、人文社会科学部4階多目的ホールで開催しました。

前半の基調講演では、都築氏がNPO法人おりがみの立ち上げから現在に至るまでの歩みと活動事例についてご講演いただきました。

東日本大震災での被災、オリンピック招致決定や大学進学を機に「社会のために何かしたい」と活動を始めた原点、パラスポーツボランティアからの活動拡大、コロナ禍での苦悩、そしてアースライトプロジェクトという大きな夢に挑戦したこれまでの軌跡が、ユーモアと熱意を交えて語られました。また、数々の挫折を経て得た「身近な仲間と活動していくことの大切さ」や「強い想いを持って現場に飛び込めば道が開ける」という現役学生への熱いメッセージが送られました。

後半では、都築氏に加え、李　永俊　地域創生本部ボランティアセンター長（人文社会科学部　教授）、そしてボランティアセンター学生事務局の学生たちが登壇し、座談会を行いました。

座談会は学生事務局からの質問に都築氏が答える形で進み、学生からは「企画を企画倒れにしない秘訣」「活動してきて、一番良かったと感じたことや大きな失敗談」「挑戦することへの恐れを克服するには」などの質問があげられました。都築氏は自身の経験をもとに一つひとつの悩みに真摯に回答し、学生たちにとって多くの気づきのある時間となりました。

最後に李センター長から「皆さんの夢は？」という問いかけがあり、学生たちと都築氏がそれぞれの未来への想いを語り、非常に充実した座談会となりました。

当センターでは、今後も学生たちが主体となって活動の輪を広げていけるよう、様々な取り組みを行っていく予定です。





陸上レーンに例えて、決められたレーンを走らなくてもいい、やりたいと思ったら違うレーンを走ってもいいという言葉に勇気をもらいました。
今はボランティアをする環境を作ってもらっているけど、都築さんのように自分でＮＰＯを立ち上げて、ボランティアをする環境を自主性をもって作り上げる姿勢をみて、とても勉強になりました。
僕たちもできることからはじめていきたいです。



清水さん

REPORT 04　令和8年度サイバー防犯ボランティアの委嘱

青森県警察本部と弘前大学地域創生本部ボランティアセンターは、令和8年6月1日（月）、弘前大学総合教育棟2階大会議室にて、令和8年度「弘前大学学生に対する青森県警察サイバー防犯ボランティア委嘱状交付式」を開催しました。

本学ボランティアセンターでは、平成29年度から、青森県警察本部がサイバー犯罪対策の一環として実施しているサイバー防犯ボランティアへの学生派遣の協力を行っています。

交付式では、出席した4名の学生が委嘱状の交付を受けた後、参加学生を代表して人文社会科学部2年 小林 幸愛 さんが「安全・安心なサイバー空間の確保に貢献する」と決意表明を行いました。次に、青森県警察本部生活安全部長 鎌田 行剛 氏から「誰もがインターネットに関する犯罪に巻き込まれる可能性があることを改めて認識し、大学生独自の視点で、様々な活動にトライしてほしい」旨の挨拶があり、本学ボランティアセンター長の李 永俊 教授からは「ボランティアの活動を通して、安全なウェブ空間を作る手助けをしてほしい」と期待と激励の言葉がありました。

委嘱を受けた学生は、任期である令和9年3月31日までの期間、ネット上の有害情報の通報や県内小中高校への講演活動などを通して、サイバー空間の安全を守るための取組みを行うこととしています。





REPORT 05

令和8年度第1回研究体験事業を実施

弘前大学地域創生本部ボランティアセンターは、令和8年7月11日（土）に弘前大学構内において、小学生を対象に、令和8年度第1回研究体験事業「大学の研究ってなにしてるの？」を実施しました。

本事業は、子どもたちに大学の研究に触れてもらい、大学についての理解を広げることを目的としています。当日参加した小学生10名は、学生ボランティアとともにテーマの異なる2つの講義を体験しました。

①農学生命科学部　林田 大志 助教

「リンゴの多様性を知ろう！」

子どもたちはリンゴの模型を観察したり、ジュースの飲み比べをしたりしながら、品種ごとの特徴や味の違いを学び、弘前大学で開発された品種への理解を深めていました。



②教育学部　今田 匡彦 教授

「身近な音に耳を澄ます―サウンドスケープから始まる音楽づくり」

子どもたちは、「耳にした音を図形で表してみよう」という課題に取り組み、それぞれが思い思いの図形を画用紙に描きました。その後、描いた図形からイメージした音をピアノで表現し、音と形のつながりを楽しみながら学んでいました。



子どもたちは、本事業を通して、他の参加者や学生ボランティア、教員と笑顔で会話しながら、楽しそうに活動に取り組んでいました。

当センターでは、今後も地域の子どもたちを対象とした学習支援活動を実施していく予定です。



原田さん

小学生と接することはいつも新しい発見があってとても楽しいです。みんな夢中で先生の話に聞き入っている姿が印象的でした。
歩きながら今流行っているものや歌を教えてもらって、交流を深めています。

NOTICE

ボランティアへの参加、募集等について

・ボランティア参加希望の方

弘前市民の方：ひろさきボランティアセンター
TEL：0172-38-5595

弘前大学関係者：弘前大学地域創生本部ボランティアセンター
E-mail：huvc@hirosaki-u.ac.jp

・学生ボランティア募集の周知依頼、派遣依頼

学生ボランティアを募集したい団体からの周知、派遣依頼を受け付けております。詳しくはボランティアセンターのホームページをご覧いただくか、センターへ直接お電話等でご相談ください。

（※各種申請書類提出後、団体登録の可否、ボランティア依頼の審議をさせていただきます。
審査等に期間を要しますので、余裕を持って登録申請等行っていただきますようお願いいたします。）

HP　X　Facebook　Instagram

弘前大学地域創生本部ボランティアセンター　平日午前10時～午後３時
〒036-8560　青森県弘前市文京町１番地　エコルモール（大学会館）２階
TEL：0172-39-3268　FAX ： 0172-34-5251　/　E-mail ： huvc@hirosaki-u.ac.jp